4 生活習慣・文化の変化と寄生虫病, 肺吸虫症の疫学データから見た感染要因としての生活習慣の変化
行天淳一 (愛媛大・医・寄生虫) Parasitosis in changes of living habits and culture; Living habits as a causative factor in paragonimiasis in Japan. J. GYOTEN

戦後から現在までの肺吸虫症の推移を、疫学調査及び症例報告等に観察し、影響を与えた生活習慣及び文化の変化を把握しようと努めた。特に宮崎肺吸虫症については、自然感染巣における、本虫の分布、寄生状況また人のサワガニの摂食習慣を考え合わせ、今後の推移を考察した。本邦に於ける文化レベル(検査、治療、衛生状態)の向上が一因となりウステルマン肺吸虫症は減少した。特に一部の地域では、生活習慣の変化が導いた感染抑制の例が存在していた。しかし、その後は旧来の生活習慣の維持がモクズガニ由来のウ肺吸虫症の残存を許し、またその待機宿主であるイノシシの生食習慣が原因となり新たなウ肺吸虫症の患者が多数出現するようになった。一方これまで見られなかったサワガニの生食が起り、宮崎肺吸虫症が出現した。宮崎肺吸虫の自然感染巣は非常に多いこと、そこではメタセルカリアの寄生数は長期に亘り安定して維持されていること、人のサワガニへの嗜好が増加していることまたサワガニの運送手段が発達したこと等から考え、本症は今後増加するものと推察された。

6 環境変化と線虫症 安藤勝彦 (三重大・医・医動物) Environmental changes and nematode disease Ando K.

地球規模の環境変化が線虫類に与える影響を2030年頃を想定して予測を試みた。①地球の温暖化: 2度の温度上昇により寄生虫の分布域が拡大するし、低温域で発育日数がかなり短縮する。②酸性雨: トウモロコシ幼虫及びレモンシロシ等ではpH3及び4で悪影響がみられた。全国的な傾向と同様、津市においてもpH4.1~5.5の酸性雨であるが池の水のpHは6.8~7.2であり、今後急に湖沼や河川の水が酸性化するとは予測されていない。③オゾン層の破壊: 人の色素性乾皮症は紫外線によるDNA損傷に対する修復機構が欠損しているためにガン化するが寄生虫の中間宿主となる蚊、魚類、両生類及び爬虫類はこの修復機構を持っており、紫外線の増加による影響は少ないと考えられる。

5 環境変化と条虫症 -特に裂頭条虫症に注目して- 西山利正 (奈良医大・寄生虫) Environmental changes and tapeworm diseases - special reference to diphyllorhynchiasis - T. NISHIYAMA

緒言: S40年前後より、新規産業の発展、経済の活性化に伴い、都市への人口集中、各産業の就職人口の増加、女性の勤労者の増加、核家族化の進行、住宅における食関係スペースの狭小化などから、食生活は変化し、合理化されている。また、コールドチェーンの整備助成(S40年)により低温流通機構が整備されてきている。今回、食生活の変化や食品流通の発達、条虫症の発症(特に裂頭条虫症)にいかに関与し得るか考察した。摂食の嗜好: サケ・マスは最も好んで食べられ、今後食べたいものとして、スモークサーモン、サケ寿司が上げられ、本条虫の感染源となり得る食品があげられる。新鮮魚介類の流通経路: 市場ルートが主流であるが、スーパーマーケットや外食産業などでは産地直送の場外流通を行うものが出現し、また宅配流通さらに活魚輸送が盛んになってきた。まとめ: 最近の裂頭条虫症は消費者の生活環境や嗜好の変化、我が国の漁業の変化、鮮魚流通の変化などが複雑に絡み合い、増加の可能性があることが証明された。

一般講演

1 家屋塵中に生息するチャタテムシの特異IgE抗体の測定 高柳 幹¹・村上巧啓²・岩谷雅子¹・尾上洋一¹・萱原昌子¹・岡田敏夫¹・荒川 良²・上村 清² (¹富山医薬大小児科、²同寄生虫、³富山日赤病院) Measurement of specific IgE antibodies to *Liposcelis s.p.* M. Takayanagi, G. Murakami, M. Iwaya, Y. Onoue, M. Kayahara, T. Okada, R. Arakawa, K. Kamimura

(目的) 家屋塵中に多数生息するチャタテムシの吸入性抗原としての役割を明らかにするため、特異IgE抗体をCAP-RASTを用いて小児気管支喘息患者血清にて測定した。また、他の昆虫類との交叉抗原性の有無も検討した。

(方法) 富山医薬大小児科アレルギー外来受診中の6~16歳の気管支喘息患者51名において、*Liposcelis s.p.* (チャタテムシ)、カイコガ翅、セスジユスリカ、クロゴキブリ、チャバネゴキブリ特異IgE抗体をCAP-RASTにて測定した。

(結果) チャタテムシCAP-RASTは培地では抑制は受けなかった。チャタテムシ、カイコガ翅、セスジユスリカ、クロゴキブリ、チャバネゴキブリCAP-RAST陽性率は、23.5%、39.2%、23.5%、15.7%、15.7%であった。チャタテムシと他4種の昆虫との陰性陽性一致率は72.5%~90.1%であったが、相関係数は0.33~0.58と比較的低値を示した。

(結語) チャタテムシは吸入性抗原として重要であり、一部他の昆虫と異なる独自の抗原性を有すると思われる。